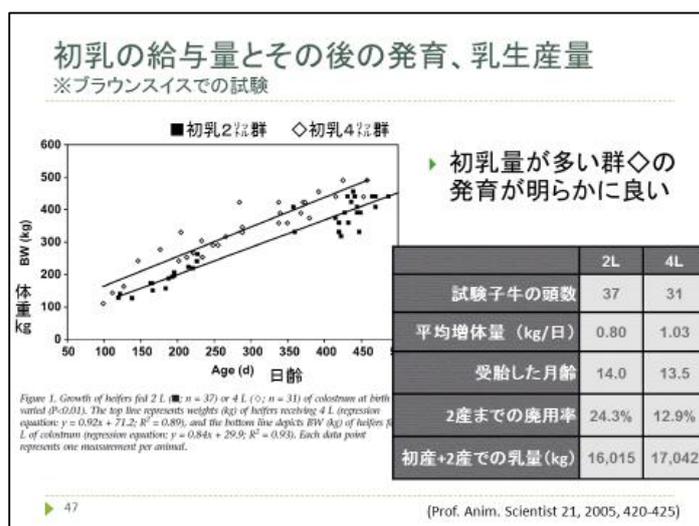


# あしよろ・ハードサポート通信

1月27日の子牛の飼養管理についての勉強会では、久富が講師を務めさせていただきました。経営者ご本人や子牛担当の女性、子供さん連れでのご参加もいただき、にぎやかな会となりました。

## ◆ 初乳をしっかり飲んだ牛は、発育や生産能力が高い

分娩した母牛から1回目に搾る乳のことを「初乳」と呼びます。初乳には免疫物質と栄養が含まれているので、子牛が生まれたらできるだけすばやく、たっぷり飲ませることが推奨されています。初乳の給与量は2ℓ×2回の4ℓが一般的でしたが、このごろは、子牛が飲みただけ、欲しがらだけ与えることが推奨されるようになりました。



左図は、1回目の初乳給与量が2ℓの群と、4ℓの群の牛たちのその後を追跡した試験です。

1回目の初乳給与量以外はまったく同じように飼養されたのですが、4ℓ群の方が発育が良く、生産乳量も順調で、2産までの廃用率が低い結果が出ています。

それだけ初乳のインパクトが強いことがわかります。

## 初乳の衛生

### ▶ パスチャライズ (低温殺菌)

- ・60～63℃、30～60分殺菌で、病原体を死滅させる
- 大腸菌、黄色ブドウ球菌(SA)、サルモネラ菌、ヨーネ病、牛白血病ウイルスなど  
(ただし、大腸菌、SA由来の毒素は残るので注意！)



最近では、パスチャライザー (低温殺菌機) を活用している酪農家さんも増えてきました。初乳や生乳を60～63℃で30～60分間加熱滅菌することで、スライドにあるようなサルモネラやヨーネなどの病原体のリスクを抑えることができます (大腸菌やSA由来の毒素は残るので注意が必要です)。

導入に当たって町と農協さんによる補助事業が平成28年度も続くようですから、興味のある方は営農部へお問い合わせください。

哺乳量を増やすのは不安という声をよく聞きますが、それ自体が下痢に直結するわけではありません。ですが、その初乳が何らかの理由で雑菌に汚染されていたら、下痢のリスクは格段に高くなります。きれいに清拭された乳頭から出てくる乳に雑菌はほとんど含まれませんが、バケツミルク、バケツ、哺乳瓶やニップルといった器具が汚れていたら、初乳の中で雑菌は一気に繁殖します。器具の衛生も重要なポイントです。

◆ ペア飼い・グループ飼いのメリット

**ペア飼い・グループ飼いの条件**

- ▶ 8リットル以上の哺乳量
- ▶ ニップルを使うこと
- ▶ スターターや水は1頭に1個ずつで競合がない

- ▶ 生後3～7日でペアにする
- ▶ 2週齢差程度までは許容
- ▶ F1やオスとのペアもOK



▶ 103

哺乳子牛をペアやグループ飼いすることでも良好な発育が得られ、離乳時のストレスを抑え、より学習能力が高い子牛に育っていく、など色々なメリットがあることがわかってきました。足寄町内にもペア／グループ飼いを長く実践している酪農場が複数あり、その手応えも良いようです。

ペア飼いの条件は、①8リットル以上の十分な哺乳量、②ニップルを使う、③スターターや水は1頭に1個ずつで競合がない、の3点です。

ミルク（栄養）不足や、環境が濡れて汚れている、極端に寒い、換気が悪い、といったときに子牛が揃って風邪や下痢を起こすのは、1頭飼いでも多頭飼いでも同じです。

**吸い合い・・・哺乳量が足りない**



▶ 104

**哺乳後、満腹になり、満足して寄り添っている子牛たち**



子牛は牧場の未来を担う存在です。哺育育成の悩みや疑問などがあれば、お気軽にお声かけください。うちはこうやっているよ、といったお話も聞かせていただけたら幸いです。  
 （久富聡子）

【勉強会のご案内】.....

- ・ 2/26（金）13:30～：乳牛の栄養について、講師：村上求氏：ハードサポート(株)
- ・ 3/23（水）13:30～：遺伝改良について（仮）、講師：細野淳氏：アルタジャパン(株)